

史料報

第 19 号

昭和48年10月

史料の保存と研究

——『萩原家文書目録』の作成を通して——

井 上 勝 生

近世史料の保存問題について、最近、学会誌などで活発な意見の表明が行われており、『史料目録』についての関心もようやく高まってきたようである。たとえば、現在の史料館・文書館等で作られている『史料目録』には、歴史意識が欠如している、あるいは、文書の原型を無視して史料をバラバラにしている、といった見解が示されている。

たしかに、『史料目録』は、研究の分野に比して発展の若い段階にあるといえよう。これは、まず積極的な『史料目録』を作ってきた史料館・文書館が、行政的に恵まれていなかった事実性に第一に規定されてい

るし、この点を考えれば『史料目録』がいかにあるべきかという議論は、制約された条件のもとでの『史料目録』への持続的な努力が存在してきたのであり、そのうえで、今漸く『史料目録』のあり方は、というような問題提起が可能な「段階」に到達したのであることを考えなければならぬ。研究者が『史料目録』に歴史意識が欠如している等々の批判を行なう際には、まずもってこのような『史料目録』と、その作成者の歴史性について深く注意されたいと思う。

『史料目録』が発展の若い段階にあるということは、こうした行政的な要因を除外して、純作業的に見れば、第一に、現在の『史料目録』が各地で分散的・散発的に作られつぱ

目 次

史料の保存と研究……………井上勝生……………	(1) 頁
図書館併置の文書館施設について……………	
……………浦俊明……………	(4)
松前町における町史編纂について……………	
……………榎森 進……………	(8)

「相良家文書目録」の作成を終えて……………	
……………上田満子……………	(10)
続維新政治史関係史料ノート……………鎌田永吉……………	(12)
「真田家文書」の閲覧停止・史料の閲覧利用と制限・新収史料紹介・彙報など……………	

なしで、研究の分野のような相互練磨の過程を持つていないことに規定されており、第二に、近世史研究が最近まで『史料目録』、史料の整理を自身にとって不可欠の一作業過程とは必ずしも見做していなかったということ、端的に云えば、『史料目録』を、あつてもなくてもいいが、まああつたほうが便利なものというように、これを研究全体の不可欠な一環としてもつてゆこうとするよりも、むしろ「研究」の便宜のためのものとして扱ってき、『史料目録』にそれ以上を期待しなかったことにあると思う。

ここでは、第一の相互練磨の場の欠如については省略することにして、第二の研究と『史料目録』——史料の保存・公開の作業過程の一環としての『史料目録』——の係り方について少しく申し述べたいと思う。私は「研究」の現段階と『史料目録』のあり方とは、明確な相互規定的關係にあると考えているのでこの両者

の係り方を考えてみることを描いて研究者の『史料目録』、ひいては保存・公開問題に対する実践的な発言はあり得ないと思う。はつきり申し上げれば、研究者は、今日の『史料目録』の内容自体を厳しく責任をもつて検証しようとするならば、これまで『史料目録』をどのように扱ってきたかということをも、まずもつて考え、これからも『史料目録』を、研究過程の一環として、いかに不可欠な作業として位置づけようとするのか答えなければならぬと思う。

この点について、私の考えを結論だけ申し述べるならば、本格的な『史料目録』を作成したのは今回が最初で、従って、全ての文書——通常の研究ではオミットするものも含めて——を読んで整理をしたものをはじめの経験であつたが、ここで感じたことは、現在の、時間・金銭・制度的にも制約された研究は、如何におもしろい文書をスピーディに要領よく「抜き取る」という、「抜き

取り」調査の段階の研究であるかということである。この点は大方の研究者も同様の見解であると思うが、文書を総合的・徹底的に調査すること、まだ計り知ることのできない研究以前の基礎的データが現われてくることは確実であり、たとえば「萩原家文書解題」にも述べたように、萩原家文書は、旗本久永氏文書・陣屋文書・私文書の合計なのであるが、これらの文書の萩原家へ伝来された歴史的由縁といった、調査の出発点の基礎知識すら、すべての文書を総合することによって、はじめて解け得たのである。

現在の近世史研究が「抜き取り」調査の段階にあるということは、逆に、研究者が「史料目録」を、研究の基礎的データを読みとる場とするよりも、むしろ「抜き取り」するための一つの便利な参考物と見做すような傾向として現われていたと思う。このような「研究」の論理に従えば、史料館・文書館は、歴史研究の自立的・持続的な一つの場とはなりえず、短らくの・断片的な「便利屋」に墮する恐れをもっているのであって、「分類目録」について云えば、たとえば全ての史料を読んだものしか示しえない研究以前の基礎的データ

を出してゆくのが作成者の独自の場ではないだろうか。あるいは、これは「史料目録」作成に限らないのであって、古代・中世史と異り、膨大な史料を扱う近世史においては、こうした研究以前の基礎的データは、研究者としても世代にわたって蓄積を共有してゆく必要が存在するのであるが、かかる蓄積の共有体制は研究体制として整われているのであろうか。このような基礎的データの蓄積の共有が獲得されるならば、かつて村の数ほど農民層分解の見解があるとか、藩の数ほど藩体制論があるといった、現在でも多かれ少なかれ同様な「論争の不毛状況」は、はじめて克服される条件ができあがるであらう。この点、長い蓄積の結果出された山口文書館の「毛利家文書目録」の整理と各文書ごとにつけられた解題、「防長風土注進案」の「研究要覧」などは、最新の研究水準をもこなした、注目すべき蓄積の成果の公表といえると思う。

二

色川大吉氏は、「第二回地方史研究全国大会」の席上で、バラバラな「史料目録」の欠点を指摘して、次のように述べられた由である。

分類する時に、史料が発見された状況を記録することが史料解読の上で重要であるのに、ただ機械的にA・B・C、その上で1・2・3、一等・二等・三等と分類するのは生体解剖と同じで、バラバラに分析してしまいがちである。史料を生きものと考えて全体性を再生してはじめて部分のもつ科学的意味が明らかになる。目下自分の史料史学を作ろうと考えているところである。（信濃二五ノ三）

ここでは、色川氏は、原型をなくした生体解剖のような分類がバラバラな分析に結果する、と「聞きこたえ」のある意見を述べておられる。しかしながら、すでに述べたような個別的な「抜き取り」調査段階の研究というそもそもバラバラな分析が「抜き取り」の便宜的手段としての生体解剖のような「史料目録」を要請しているのもあって、この両者の相互规定的な関係として考えなければ事態は解決してゆかないと思う。さらに云えば、現在の個別的な「抜き取り」調査段階の研究は、史料が発見された状況をそのまま再生する「史料目録」を考えるという段階の以前に、具体的に史料の原型を破壊しつつさえるのだということを問

題提起したいと思う。

現在の「萩原家文書」の本体は、群馬県東村の現萩原家に、村文化財に指定され、良好に保存されているのであるが、当史料館所蔵分と同一の、江戸久永家と東村陣屋役所の間の「用状・御用状」がそれぞれ括られて一千通以上残されている。この一括りは、当史料館所蔵分を年代推定した結果から考えて、また年代を上書きしたのも発見されたので、一年代ごとに括られたものであることは確実である。この場合、一括りの中から、おもしろい何通かを「抜き出し」たら、元へ戻すことはほとんど不可能になつてしまうので、この文書群には一さい手をつけず、萩原家へも、この大量文書は、一たん括りをほどけば決して元の所へ戻しえないものであることをお話しして、県なり、村なりの何らかの本格的な組織的な調査が行なわれるまでこのまま保存しておくて頂くようお願いしてきたのである。きわめて注意深い調査でも、一通文書は意外に紛れやすいものであるが、これが研究を目的とした限られた時間の個別的な「抜き取り」調査であれば、おもしろい文書を探し、文書を抜き出す以外に手はないのが現実であるから、

結果として、「抜き取り」調査は、「史料目録」の問題以前に、文書の原型を破壊する恐れすらあるのだということを考える必要があると思う。現在の研究体制のもとでは、その責務を果たすためにやむをえないことであるとはいえず、このような事実は、現在の研究が、文書の整理や研究以前の基礎的なデータの広い蓄積・共有の過程、たとえば一つの形態として「史料目録」を不可欠の作業過程として体系化していない——また体系化する必要も持っていない——段階のものであることを示しているのである。以上述べてきたような研究の発展段階を、私は「抜き取り」調査の段階であり、極論的に云えば「保存なき研究」の段階であると呼びたいと思う。この「保存なき研究」は、すでに述べたように、逆に保存・公開の機関に対して、時として「研究なき保存」、「研究」の便宜としての職人的な「保存」を要請してはいなかったであろうか。このような「保存なき研究」と「研究なき保存」の相互補完的な状況として、史料館・文書館が便宜的・職人的な機関になつてはならないし、これらの機関も、保存と研究の全体性において整備されなければならないと考えるのである。事実、これまで優れた保存・公開の成果をあげた機関は、

制約されたきつい条件のもとでも、研究者でもあることを堅持した人達によって支えられていたのだといつて差しつかえないと思う。行政的・人事的・予算的に相当に制約された史料館・文書館では、保存と研究の両立を追求することは厳しいのであつて——この点、地方文書館の設立によつて、戦後一時期の収集機関としての一定の役割を縮小してしまつた当史料館は比較的になな条件であつたとも云えるが——保存に専念すべきか、研究もするべきかというような二者択一の型で迷う各機関の若手館員の声をよく聞くのであるが、これは、行政的に限られた条件を固定したものと同前提してしまふから、そのように二者択一として問題が提出されるのであつて、厳しい条件は承知のことであるが、史料館・文書館は本来この両者を全体として両立しうるものであり、そのような型で行政的・人間的・予算的な充実の運動とからめて問題を追求してゆくより道はないと思う。

三

各史料館・文書館の行政的な諸条件の不足については、その対照としてよくヨーロッパの文書館の歴史の深さと、文書士の大学教官なみ、あるいはそれ以上の優遇ぶりが述べら

れ、日本にもヨーロッパのような文書士制度を設けるべきであるという意見が出される。たしかに、日本にヨーロッパのような文書士制度を輸入することによつて、事態ははるかに好転することが考えられる。しかしながら、ヨーロッパの文書士が「文書士制度」として定着する論理を考えた場合、そこに問題がない訳ではない。第一ヨーロッパ「文書士制度」を見ると、そこでは、どんな小さな文書館にも一級・二級・雇いの文書士というような学歴と資格（ドクター・マスター・学士）の相違によつて厳たる位階性が敷かれ、それぞれが個室を与えられるかどうかというような問題で大学教官以上にはつきりとした差別化されているということを知らなければならぬのである。「文書士」という優遇制度をそのまま持ち込むことは、行政的にはこうした位階性をもちこむことを避けるかどうか考えてみなければならぬ。しかも、ヨーロッパの文書士は、「ドイツ・イデオロギー」がすでに「歴史記述においてひとかどの仕事をする」とは、「唯一者」（マックス・シュティルナー）にとつては絶対に不可能であつて、フランス人たちはここでもまたとくに労働の組織化によつて他のすべての国民を追い抜いた」と述べているように、

「研究」と「保存（公開）」の完全な分業体制によつて進展してきたのである。この分業体制が、フランス人文学派（勤勉な個別実証主義）を生み出してきたのである。そこには、近代の合理化・効率の労働に対する絶対的な信念があくまでも貫かれていたのであつて、かくて、「保存」機関は、専業化・職人化したのである。ここに、文書館における学歴と資格による、教官以上に固定的な、中世的とも言えるような職人的な身分差ができたのは、このような人文学派の近代の合理化思想による分業の絶対的追求と無関係ではないのである。現在は、このような合理化思想や効率的労働の絶対化はすでに再考されており、日本においては、すでに述べたように、保存と研究を総合した全体性としての史料館・文書館が追求されねばならない。この点あえて「文書士制度」の輸入を考えられるのは、その由縁を再考していただきたいと思う。教育と研究の不可分性が大学において効率化論理に対して要請されている現在、保存と研究の不可分性も、史料館・文書館に要請されているのであつて、ここにおいては、効率化論理に対して学としての全体性が守られなければならないのである。（終）

図書館併置の文書館的施設について

三 浦 俊 明

(神奈川県立平塚
江南高校教諭)

の保存。(3) 1・2史料の公開利用等

一
ここ数年來、都道府県段階における文書館的施設は数多く設立され、もしくは設立が予定されている。山口県文書館の調査によれば十四の都道府県がその施設をもち、五県が設立準備中であり、八府県において設立構想をもっているという(山口県文書館「文書館ニュース」七号)。

市町村段階の施設となれば、この数はさらに増加するであろう。これらの中で最近特に目立っているのは県文化センターという総合的施設の一部門という形で文書館的施設が設立されている点である。各部門の美味は県立図書館に併置された資料館であったり、あるいは博物館法の適用を受けた民俗・考古・歴史各分野資料の総合的資料館であったりする。

文書館的施設の目的は、(1)経済の高度成長にともなう都市周辺農村の急激な都市化とその過程における古文書の散逸・湮滅の防止。(2)都道府県および市町村の行政機関で行政上の必要から廃棄される行政関係文書

であり、これらは明治百年記念または市町村制施行記念事業として行なわれることの多い県市町村史編さん事業を契機として設立される場合が多い。施設の設立自体は、史料保存対策が遅れている現状にあつては望むべきことであり、歴史研究者を中心に進められてきた史料保存運動の成果として評価すべきであろう。

問題は諸外国に存在するいわゆる文書館の設立ではなく、文書館的施設といわざるを得ないところにある。そしてこれは史料保存運動を進めてきた人々が望んでいた「歴史資料保存法」が、現政府の提出法案としては立法の可能性がないという条件がそうさせているものと思われる。つまり公共の文書館を設立・運営するための拠りどころとなる法律が存在しないことが、文書館的施設を生み出す基因となっている。真の文書館建設を願うものが設立・企画にタツチし、また運営に携わったとしても終局のところ、行政ベースでしか事

が運ばないというのも、行政当局は往々にして、明らかに文書保存・利用などをうたい、専門研究者の意向を十分くみとるような形の独自の法律がないと事を進めないという点から生じているものと思われる。

該当する法律が存在しないので、当然他の関連法によって施設は設立される。それは文化財保護法、であったり、図書館法、博物館法であったりする。各都道府県段階では、これらの法律を受けて、それぞれの条例、例えば図書館条例、博物館条例を設け、そのもとにおいて文書館的施設を置いているのが現状である。

私は一日も早く歴史資料保存法が制定され、それに基づく真の独立した文書館の設立を願うのである。

そこでここではこのような現状を認識したうえで、当面、文書館的施設は如何なる法適用を受けて設立されるべきであるか、という問題について、特に図書館法、図書館条例の適用下で設立されている文書館的施設の場合を例にして考えてみたい。

二

文書館が基本的に収集、保存すべき資料とはどんな資料なのか。この点について山口県文書館条例第一条は次のように規定している。

山口県の公文書及び記録並びに、県内の歴史に関する文書及び記録を、収集し、及び管理するとともに、これらの活用を図り、もつて文化の発展に寄与するため、文書館を設置する。(傍点筆者付加)

ここでは収集すべき資料について1、県の公文書及び記録、2、県内の歴史に関する文書及び記録の二点にしばっている。つまり現在独立の施設を建設して保存することが望まれている資料そのものを収集対象としている。山口県のように独自の文書館設置条例であれば、このように規定できるが、図書館条例に基づいて施設が設立されると収集資料については往々にして次のように規定される。

歴史的価値のある文書及び記録その他の必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その調査研究及び教養の向上に資すること。

というのがそれである。これは某県の例であるが、今後、公共図書館に併置される文書館的施設では、おそらくこれと大差のない条例によって規制されることになるであろう。ところで、この条例による収集、保存資料は、1、歴史的価値ある文

書及び記録、2、その他必要な資料となる。現在、収集、保存が叫ばれている行政文書の積極的収集については規定されていない点が山口県の場合と比較すれば明らかであろう。

図書館法は、図書館で収集、整理、保存をする図書館資料について、「郷土資料、地方行政資料、美術品、レコード、フィルム」の収集にも十分留意して、図書、記録、視覚、聴覚教育の資料その他必要な資料」を収集すると規定している。したがって各地の公共図書館では多くの場合、郷土資料室(課)を設けて、郷土資料、地方行政資料等を積極的に収集している。その際、郷土資料、地方行政資料の内容は次のように考えられている。郷土資料とは主として紙を材料とした図書記録資料であり、この中には郷土に関する文書、記録をはじめとして、新聞、雑誌、書画、写真、マイクロフィルム等が含まれる。

地方行政資料とは、地方公共団体、国の地方行政機関で作成する資料であり、政府刊行物中の当該地域の行政に関する資料および住民の地方行政に関する資料である。ただし、必ずしも刊行されたものばかりでなく、生の文書、記録類も含まれる、とされている(沓掛伊左吉「郷土資料に

ついての覚書」神奈川県立図書館「郷土資料解説目録」第二所収参照)。

これは某県立図書館で用いている規定であるが、図書館関係雑誌等でしばしばこれが引用されているのを見れば、かなり一般的に用いられていると考えてよからう。

文書館の施設を図書館組織機構の中に位置づけると、この郷土資料、地方行政資料の収集、保存を行なっていた郷土資料室(課)を発展的に継承することが考えられてしまう。

こうして成立した文書館の施設では一体何が収集、保存されることになるのであろうか。歴史的価値ある古文書の他に郷土に関する一切の図書(小説類を含む)、新聞、パンフレット、書画、フィルム等を積極的に収集することになる。その結果、これら図書館資料の整理に迫られ、肝心の文書資料の収集、整理は大巾に遅れるということになりかねないのである。これでは古文書の散逸防止や行政文書の廃棄処分対策としては当面役に立たない施設になってしまうのではなからうか。

三

図書館法によれば、図書館とは、図書館資料を一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーシ

ョン等に資することを目的とする施設である。

文書館の施設が図書館に併置されると、行政文書の収集が消極的となり、古文書の収集、整理が遅れるのはこの点に係わっているのである。

いうまでもなく都道府県等の行政当局が文書保存について最も憂慮していることは、行政文書が公開されて行政上の機密が漏洩することであると思われる。行政機関において毎年作成される文書は、その重要性に照らして例えば永年・十年・三年・一年等と保存年限を設け、年限を経過したものは廃棄処分すなわち焼却に付している。つまり外部にはできないだけ文書内容を明らかにしないように配慮されているのである。したがって行政当局が、行政文書を資料はすべて一般公衆の利用に供する、すなわち公開閲覧の原則をとっている図書館法の適用を受けている施設へ引渡すことには極めて消極的になるのは当然である。しかも図書館では資料の調査研究等に資することが目的であり、博物館のように資料の調査研究をすることが認められていない。図書館ではまさに第三者に閲覧させるといふ目的でしか行政文書を収集することができないため、行政

当局を説得するには非常な困難を要するのである。

以上の点から図書館併置の文書館的施設では、行政文書の収集、保存は困難であるといえるのではなからうか。

右記した如く図書館には資料の調査研究機能が含まれていない。図書館の専門職員である司書は、図書館の専門的事務に従事すると規定されている。だから資料の調査研究その他専門的事項を司ごることになつていく博物館学芸員の業務とは質的に異なっている(だからといって現実の図書館司書が資料研究をしていないとは思わない。ただ法的にはこうなっているというのである)。古文書の収集、整理、保存が、特に史料学が未確立であるといわれる現段階においては、調査研究機能なしに進められることが可能なものであろうか。この点は多言を要しまい。

このように図書館内に設立される文書館的施設では、現在、早急に収集、保存の必要性が認められている行政文書、古文書の収集、保存は十分に行ない得ないといわざるを得ない。したがって、やはり独立した文書館の必要性が強調されねばならぬであろう。

しかし当面、歴史資料保存法の立法化が見込まれないとすれば、右記したような図書館併置の施設よりもむしろ次のような様々な方向が考えられてよいのではなからうか。

1、山口県のように独自の文書館設置条例を設けて、それにもつく施設を設立する。

2、図書館には必ず管理運営のための規則(管理規則とか組織規則等と称されるもの)がある筈であるが、その中で文書資料を図書館資料と区別して扱える組織を作り、なおかつ文書資料の調査研究機能を有する施設にする。埼玉県施設のこのような例として考えられる。

3、博物館法適用下の施設にする、等々である。

以上、私は図書館法等の法律面から文書館の必要性を強調してきたつもりである。その中で現行図書館の内容にまで触れている部分もある。しかし私は図書館の存在意義を軽視する考えは毛頭ない。最近の図書館資料の氾濫状態をみれば、図書館の拡張、新設が望ましいと考えている。文書資料は図書館資料とは別分野のものであり、したがってその収集、保存施設も自づから別立てにすべきであると主張したのである。(終)

第十九回近世史料取扱講習会開催される

九・十月、東京・京都二会場

当館主催の表記講習会は、左記要項により二会場各四〇名の受講者の参加を得て開催され、所期の成果を挙げて終了した。

〔開催要項〕

〔趣旨〕

公共機関などにおいて、近世史料を取り扱う事例の増大に伴ない、これに関する知識技能の向上が要請されている現状にかんがみ、当該関係者に近世史料の読解・調査・収集・整理・分類・保存管理などに関する基礎的な知識技能を取得させ、近世史料の保存、利用の効果を高める。

〔期間および会場〕

A、昭和四八年九月一七日(月)～九月二二日(土) 国立教育会館

B、昭和四八年一〇月一五日(月)～一〇月二〇日(土) 京都府立総合資料館

〔受講資格〕

図書館・史料館・博物館・研究所・史誌編さん室その他の機関に勤務し、近世史料の整理および調査研究

等に従事している者で、その経験年数の比較的浅い者

〔四講習題目と講師(敬称略)〕

A、東京会場

(1) 古代中世史料概論…名古屋大学文学部教授 佐藤進一

(2) 近世史料概論(Ⅰ)…東京都立大学文学部教授 北島正元

(3) 近世史料概論(Ⅱ)…東北地方を中心に…福島大学教育学部教授 小林清治

(4) 近世史料概論(Ⅲ)…東北地方を中心に…東北大学文学部助教授 渡辺信夫

(5) 近代史料概論…東京大学社会科学研究所教授 大石嘉一郎

(6) 史料の補修…宮内庁書陵部専門官 遠藤諦之輔

(7) 史料の保存科学…東京国立文化財研究所第一修復技術研究室長 岩崎友吉

(8) 史料読解(幕藩・村方・町方)

(9) 史料の整理・管理

(10) 史料の分類

(11) 民俗資料の取り扱い法
(8) (11) 当館教官担当

B、京都会場

(1) 古代中世史料概論…名古屋大学文学部教授 佐藤進一

(2) 近世史料概論(Ⅰ)…京都女子大学文学部教授 小栗田淳

(3) 近世史料概論(Ⅱ)…近畿地方を中心に…京都大学文学部助教授 朝尾直弘

(4) 近世史料概論(Ⅲ)…近畿地方を中心に…大阪府立大学教養部教授 森杉夫

(5) 近代史料概論…東京大学名誉教授 古島敏雄

(6) 近世の民俗…大阪市立博物館長・大阪市立大学文学部教授 平山敏治郎

(7) 史料の補修…宮内庁書陵部専門官 遠藤諦之輔

(8) 史料読解(幕藩・村方・町方)

(9) 史料の整理・管理

(10) 史料の分類

(11) 資料の保存科学

(8) (11) 当館教官担当

その他、両会場ではいずれも座談会、施設見学(国立公文書館・京都府立総合資料館)等を実施。

昭和四八年度 新収史料紹介 (一)

受託史料

伊達家小 野家文書
家中

本文書の大半は、すでに昨年度において原蔵者から当館に寄託されたものであつて、その経過および内容については本誌前号で紹介した通りである。その際、諸般の事情により一部の史料を寄託史料から除外したことも前号に記しておいた。それが原蔵者の深いご理解によつて、その除外史料の全部を改めて寄託されることとなつたもので、前回の分と合せて新たに一括して寄託をうけることにしたものである。

前回の除外史料については、受託史料との関連利用を計るためにも何らかの方法によつて収集する必要がある、例えばマイクロによる収集などを検討していたところであつた。

そこへ、わずか半歳にして追加寄託のお申出を受けたことは、何よりも原蔵者の史料および史料保存に関する強い熱意とご理解によるものであつて、ここに誌上をかりて、原蔵者釘宮氏に対して改めて敬意を表するとともに、深甚の謝意を表する次第である。

本文書の点数は、前回の四五九点

に今回の二五二点を加えて合計七一点となつた。前回分については前号の記事を参照していただき、ここには今回加えられた史料について概略を紹介しておく。

前号にも記した如く、維新時の当主小野成信(莊五郎)は、露人ニコライの教導をうけ、日本におけるギリシヤ正教の創設・布教に加わり、後に司祭に聖叙された。この入信およびその後の宗教関係史料が今次の寄託史料の中心となつてゐる。まず日記は、入信前の慶応二年から明治二年、同三年、同十六年および没年である同四十年のもののほか旅行中の日記があり、簡潔な行文ながら交際・米往の詳細を伝えている。次に約五十通の書状には、莊五郎の母親からの手紙なども含まれているが、量的には宗教関係者のものが多い。

主な発信人を挙げれば、ニコライをはじめ、莊五郎と同じ仙台藩士から入信した、高屋伸、笹川定吉、真山温治、津田徳之進らを中心とする同門者、同じく同藩出身で約三十年の滞米の後に帰国して信仰界に影響を

与えた講和社の新井奥遠などがある。

また、明治十年三月から仙台で発行された『講習餘誌』は、小冊子ながらキリスト教関係の出版物としては貴重なもので、欠号のあるのが惜しまれる(1-17号の内5・8号欠)。

伝教学校の出納書類や、大阪正教会への神父らの出張旅費請求書などは莊五郎在阪時代の史料である。

このほか、維新时期における仙台藩関係の二、三の史料をはじめ、前回の分にも多く含まれていた漢詩文やニコライ・莊五郎ほかの肖像写真がある。このうち、莊五郎の漢詩は慶応二年から明治三十年までのものが『蕪業』二冊にまとめられ、以後の分も『丁酉詩稿』のように毎年の作品が整理されていて、明治三十九年まで続いている。

なお、前号において(本誌第18号三頁、第四段、七行目)、莊五郎の聖職を司祭とすべきところを司教としたのは当方の誤りであつて、原蔵者ならびに関係者に大変ご迷惑をおかけしたことに深くお詫び申し上げます。ともに、ここに訂正いたします。

(総点数七一点。原蔵者「東京都大田区西馬込二一一」 釘宮廉子氏)

「真田家文書」の 閲覧停止について

昭和二四年度に当館に収納された信濃国松代藩主「真田家文書」は、その総点数三万(うち冊子類約一万、一紙類約二万)を優に上廻る史料であり、ひとり当館においてのみならず、全国的にも量・質ともに最大級の藩政史料として関係者に知悉せられ、今日までその利用も地元長野県をはじめ各地から少なからぬものがあつたが、何分にも総量がぼう大であり、かつ綿密な基礎的調査・研究が必要であるため、これまで館の内部体制上の理由から、本格的整理・公開利用のための目録刊行事業に着手できませんでした。しかし、今年度から四カ年計画で、取敢えず冊子類の整理・目録刊行の準備作業体制に入つたため、およそ本年末から向う四カ年は一般の閲覧利用を停止せざるを得なくなりました。事情ご了解の上、よろしくご協力下さるようお願いいたします。なお、このことについて詳細お知らせになりたい方は、至急当館にお問合せ下さい。

ここ数年来、地方史のあり方について活発な論議が行なわれている。ごく最近でも、『歴史評論』六月号、『地方史研究』六月号で「地方史研究の課題」を特集し、多くの研究者諸兄がそれぞれの立場をいかしながら、問題の本質を鋭くついた優れた提言を行なっている。筆者も、地方史研究に携わる者の一人として、こうした論議に非常に大きな関心を持ち、自分のかかえている問題を鋭くついた論文に接すると、その度毎に

松前町における町史編纂について

榎 森 進
(松前町史編集室 室長)

胸がチクリと刺される思いをしたり感動したりする。

しかし、全体的にみると、やはり抽象的な論議が多いように思えてならない。「あるべきこと」は痛い程判っていても、それじゃ具体的にどうすればいいのか、となると自分のかかえる問題があまりにも多いだけに、途惑いを感じてしまう。特に地方も地方、過疎化に悩む小さな田舎町で、研究者というよりは一地方自治体の事務職員という身分で町史編

集に携わっていると、論点の正当性に感激しつつも、それをすぐ実践の場に移せないという問題につき当る。そして自分の考えと最も密着しているはずの『歴史』や『地方史研究』で展開されている地方史論も、いつとはなしに遠い存在に感じてくることもある。でも、一方では、現在提起されている問題点をなんとか実践の場を通じて解決してみたいという強い欲求にもかられてくる。

そこで、ここでは、筆者が現在直

接関係している北海道松前町の町史編集の方法やそこでの問題点を紹介しながら、地方史というジャンルの中で最近とみに大きなウェイトを占めつつある府県史や市町村史とは、本来どうあるべきなのか、といったものをさぐってみた。

まず、本論に入る前に松前町の概略を示しておく、松前町は明治以前、松前藩の城下町として発展した町で、近世北海道の松前三湊の一つ。しかし、明治二年開拓使が設置され

北海道の政治経済の中心地が札幌に移ってからというもの急激に衰退の一端をたどり、かつての蝦夷地の中心地・城下町・港町という性格から出稼の町、一漁村へと変貌、現在は人口二万弱の小さな漁業の町である。しかも、漁民の八割近くは、毎年東京・名古屋方面に出稼に出ている。町の年間予算は約二〇億円、内八割近くが、国及び道の補助金である。また、町には図書館や史料館というものがなく、松前城天守閣内の展示室が僅かに史料館・博物館的な機能を果たしているに過ぎない。

こうした自治体での町史編集である。そこには当然市の段階では考えられない数多くの困難な問題がかかえこんでいる。財政的な問題もさることながら、史料館や図書館がないという問題は、即参考文献の不足となつて編集作業に致命的な影響を及ぼし、さらには、地元だけではどうしても専門的研究者を獲得できないという問題にもつき当る。しかも、歴史の古い町でありながら地元これといった文書や記録類が殆んど残っていないという大変な問題をかかえている。町史編集をする上での外的条件を考えれば、どれ一つをとっても有利なものはない。むしろ、不

可能な条件のみである。

こうした悪条件をかかえながら、去る昭和四十二年から「町村合併二十周年記念事業」(昭和二十九年、一町三村が合併し、四十九年が新町発足二十周年に当る)という名目で町史編集の事業が開始されたが、当面の課題は、こうした悪条件をどう克服するかにあった。ただ、ここでその後の作業を進める上で大きな力となったのが、「少々時間や予算はかかって、この機会に内容の充実した町史をつくりたい」という町長の前向きな姿勢があつたことである。

しかし、町長のこうした前向きな姿勢があつたにしても、自治体という一つの行政機関でことを進める限り、そう手ばなしで喜んではいられない。自治体というのは、たとえ首長の前向きの行政方針があつたにしても、その具体策が住民はいうまでもなく、行政機関で働く職員全体に良く理解されなければ、確実なものとして継続しないからである。単なる一時的な思いつきだけでは長期事業としてはならない。そこで、内容の充実した町史とは何か、またその編集はどうあるべきか、ということがまずもって問題とされた。

昭和四十二年といえ、明治百

年「開道百年」のキャンペーが華々しく行なわれていた年である。

道内では、開道百年とその町の開基百年がほぼ一致する自治体が多かつたところから、市町村史編さんが一つのブームになり、装釘の立派な『〇〇市(町)史』がぞくぞくと出版された。しかし、その内容となると非常に問題が多く、その地域の具体的な発展過程が不明確で、はな

はだしいのになると『新撰北海道史』の中にその地域の個別的史料をぶちこんでいく方法がとられたり、市町村勢要覧の寄せ集めのようなものもみられた。これは、本道での歴史研究者層の薄さ、さらには研究上の問題意識、編さん体制など色々な要因がからみあつて結果したものだが、概して学問的水準が非常に低いという特徴がみられた。一方全国的な動向はどうかといえば、学問的レベルは非常に高くなつてゐるものの、地域に根ざすという面では多くの問題を

含んでいるように思える。

つまり、道内道外ともそのあり方に大きな相違がみられても、結局「地域に根ざした住民のための郷土史」になつていないという相共通した問題をもつてゐる。地方史のあり方が再び問われているのも、そのためであらう。とすれば、こうした欠陥を克服し、しかも先にあげたような松前町のかかえる諸条件にあつた町史をつくりだすための新しい方法がみいだされなければならない。また、町史編集というものが、単に出版社の本づくりとちがつて、地域の大きな文化的事業でもあり、作業の過程も地域に根ざしたものでなくてはならない。

そんなことをあれやこれやと考えさらには道内外の研究者諸兄の御教示をえながら、最終的に次のような方針をとることにした。

(一)、町に史料館、図書館がなく、かつ古い歴史を有する地域でありながら地元の基本史料が殆んど残つていないという事情を考え、町内外から関係史料を可能な限り収集し、その史料(多くはゼロックス複写・写真・マイクロフィルム等)はそのまま保存し、将来の史料館建設への基とする。

(二)、松前の歴史的な条件を生かした町史にするには、まずもつて歴史学界の研究成果を積極的にとり入れ、基礎的な研究作業をする必要がある。そのためには一定の編集期間と全国の研究者との交流の場を必要とし、それにみあうような

方法をみいだしていく。

(三)、町史編集事業は、本をつくるだけが目ではなく、その結果も含めて、編集過程を住民に知らせ、住民と編集者が一体となり、その過程を通じて住民の正しい歴史意識を形成していくという役割もつてゐる。したがつて、そうした場を積極的につくつていく。

こうしたことはごくあたりまえの事で、すでに多くの編者によつて指摘されていることのほんの一部にすぎないが、これだけでもいざ地方自治体という行政機構の中で実践していくとなると実に困難な仕事である。

(一)については町の特徴から比較的スムーズに理解されたが、(二)(三)となると急に大きなカベにつき当つた。行政担当者の中にはただ本さえつくればよいという考えが根強く存在し、それ以外に手を出すのは何か予算の無駄使いになると考えられる。したがつて、まずそうした考え方がまちがっていること、基礎的な研究や学界との交流さらには住民との結びつきがない中でできた本こそ、予算の無駄使いになるということをねばり強く話しつづけてきた。しかし話だけでは力にならない。一定の理解をえた上で、行政マンとして生きる人た

ちにも「なるほど」と思つてもらへるような説得力のある実践が必要だ。

そのため、昨年度から「町史研究紀要―松前藩と松前」(A5版・平均一〇頁・活版印刷)を発行、研究論文・史料紹介の他に町民の生活と密着した聴取調査結果を掲載、現在まで三号の発刊をみているが、合せて庁内向けの機関紙「町史編集室だより」を毎月発行し、町史編集の進行状況や問題点さらには全国から寄せられた紀要や町史に対する意見・感想文を掲載してきた。町史編集のかたわらこうしたものを発行するのは事務的にも実に労が多く大変だが、この二つの試みは(二)(三)を実践する上で一定の成果をおさめている。住民はじめ町職員の町史編集に対する関心の度合も非常に高くなつた。

とにかく、まだまだ多くの問題点をかかえているが、町史編集は、地域における一つの大きな歴史意識形成のための運動であり、それなくしては地域に根ざした町史はできないと考え、そうしたものをめざしてヨチ／＼歩きしているのが「松前町史」である。なお同町史は「史料編」三巻、「通説」二巻の計五巻の計画で、昭和四十九年に「史料編(一)」を発刊する予定である。(終)

「相良家文書目録」の作成を終えて

上 田 満 子

(熊本県立図書館 参)

昭和三十四年人吉の相良家から購入した相良文書は、当館所蔵の史料のなかでも最も貴重なものの一つである。早くから目録の刊行が期待されていたが、このほど昭和四十七年刊行の「郷土資料増加目録」に収録した。これがきっかけで「目録作成について」原稿を依頼されたが、この相良文書は相良家にあった時、すでに同家史料調査編纂員渋谷秀五郎氏が整理していたものであり、今回の目録編さんについて、ここで特にとりあげて説明するものでもない。

◆相良藩について

人吉藩(相良藩)は二万二千余石の小藩であったが、鎌倉以来明治維新に至る六〇余年間を一領主によって統治された全国でも数少ない藩で

ある。藤原鎌足の嫡子不比等の長男武智磨から数えて十七代目にあたる周頼が、天永三年(一一二二)遠江国相良荘に居館を定め相良氏を名乗ったのはじめで、それから数えて六代目頼景が、建久九年(一一九八)源頼朝から肥後国球磨郡多良木荘の支配を認められたと考えられその長子長頼が元久二年(一一〇五)正式に人吉荘の地頭職に補せられた。これが近世人吉藩につながるものである。(森田誠一著『九州の諸藩』参考)

この相良氏の統治記録である相良文書のうち当館のものは、昭和三十二年慶応大学に収蔵された中世文書に對し、近世文書で、天文十五年八月十五日相良義滋書状から明治二十年代に至る二、〇〇〇余点と、他に渋谷氏が昭和五年に文書を筆写した「相良史料」一八冊から成っている。

◆目録作成についての問題点

目録編さん作業で一番問題になったのは次のことであつた。

- 1、史料の分類・排列
- 2、標題記入
- 3、文書に對する知識の欠如

図書館に受入れた時、史料は一点ごとに封筒に納められ、上書に、年代・内容を記入してあつた。当時図書館では整理体制も確立されていなかったもので、史料は年代順に排列し、通し番号を封筒に打って保管した。当館にはこの他にも「家わけ」で整理した村方文書が数種あるが、これ等は点数も少ないので、この方法で十分間に合っている。

しかし相良文書は点数も多く、内容も次のことがらに關している。

- 朱印状、領知目録、鄉村高帳
- 藩主の系譜、相続、家督、官位
- 書状、交際
- 城郭、屋敷
- 御代替替詞、参勤交替
- 藩法、職制、藩政、藩庁、役人
- (相良清兵衛事件、椎葉山騷乱)
- 藩財政(お手判金事件)
- 軍事(丑年騷動)
- 藩士、知行、系譜
- 寺社(真宗禁制)
- 学芸(詩・和歌) 遊芸(能)
- 絵図など

これらの中には年代の不明なものも相当ある。しかし内容的に貴重な

ものもあるのではないかと思われ、その処理に困った。

そこで、この際内容によっていくつかの分類項目をたて、それにしたがって同内容のものを集めた方が検索の上で便利ではないか、と考えたが、館の整理段階がいまだ近世史料独自の分類表を作成するに至っていないことから、期限のある目録編さん作業のうえで、分類の検討から行なうことは困難であつたので、初歩的ではあるが編年方式をそのまま採用した。相良藩には「清兵衛事件」をはじめいくつかの騷乱事件があるが、これら一つのことを年代を追って研究していくうえにはこの方法は便利である。

標題は最初渋谷氏がつっていた件名をそのまま採用する予定であつたが、氏の件名は必ずしも原文に記載されているものをそのまま写しとってはいない。例えば

No.229 (相良金之助初御目見に關する件)

No.205 (馬込領中延村抱屋敷開取払の件)

No.108 (清兵衛事件御勝訴を国家老に報ぜられたる書状)

(註) No.は蔵書目録の史料番号と具体的に内容を説明した件名を付

している。近世庶民史料調査委員会の目録記載例では「原史料の表題は必ずしも重視せず、内容によって調査者が各自の判断により適当な表題をつける方法もある」とある。しかし図書館の「日本目録規則」(NCR)では「書名を欠くもの、不完全な書名は角括弧に入れて記載しなければならぬ……」とある、NCRで行えば、渋谷氏の表題はすべて角括弧で囲まなければならない。これでは目録のスタイルとして複雑ではなかろうか。原文書に表題がある場合それを採り、無いものについてだけ渋谷氏の表題を記し「」で囲めば、その複雑さは幾分かは避けることができる。

そこで目録記載の順序、方法を次の要領で行なうことにした。

1 史料番号

2 標題

3 作成者

4 作成年次

5 形態

6 数量

記入の方法については

(1) 標題は原文に表題のあるものはこれを採り、ないものについては仮の名を付し、原表題と区別する為「」でかこむ

(2) 書状は作成者・宛名を記し、官名・通称・法名で氏名の推定できるものは「」に入れて記入する。

(3) 作成年次は年・月・日までとするが干支は省略する。標題から推定できる年次は省略する。

(4) 形態 一冊ものは美濃版、半紙判とし、書状あるいは一紙ものは通、絵図は枚とする。

いざ標題記入をしてみると、表題はあっても「覚」「廻状」あるいは「口上覚」「証文之事」とだけ記載してあるだけで内容の説明はない。原表題記入を原則としても、先にあげたNo.205については結局次のような記入になってしまった。

口上覚 相良近江守〔長興〕〔馬込領中延村抱屋敷取払の件〕
年代未詳 一通

「口上覚」は原表題であるが、これだけでは内容が判らない、そこで〔馬込領中延村抱屋敷取払の件〕と仮標題を付したのである。しかしこれでは、仮標題か、注記かの区別も判然としない、むしろ

〔馬込領中延村抱屋敷取払の件につき相良近江守〔長興〕口上覚〕
年代未詳 一通
と記入した方が明瞭であったかもし

れない。

書状について、渋谷氏は家老達の連署状の場合

国家老から江戸家老へ

と、原文書には家老の姓名が記されている、役名だけを記して処理していたので、

No.289〔国家老菊池衛士外連署状〕

井口藤次左衛門〔江戸家老〕宛

とした。作成者、あて名、形態など目録の記入について具体的なことに触れていたら限りが無いが、目録作成が終わって強く感じていることは「このような目録で果して研究者の役に立つだろうか……」という不安である。それと関連して、文書に対する知識の欠如ということ深く感じた。文書の整理をするには史料の解説が出来るということは一番肝心なことではあるが、たとえ解説はできても、文書には文書自体が持つ特性があり、作製せられた社会に対する知識と慣用とに通暁していなければ正確な整理はできない。例えば文書の様式・文書に使われる慣用語など参考書によって一応その知識は得ていても、いざ文書に接してみると「この文書はどのような目的のため、誰によって、誰にあてて作成されたものか」基本的なことが理解できな

くて苦労した。そのためにも広い知識と豊富な経験が必要であることを痛感している。

戦後地方史研究の発展はめざましいものがある。また地方自治体による府県・市町村史誌の編集ブームは、図書館における歴史資料の利用を高め、原史料に対する関心は次第に高まりつつある。

しかし社会教育の一機関として、地域社会へ幅広い奉仕活動を行なっている今日の図書館において、司書が整理に費す比重は極めて少なく、殊に近世史料等に関する整理体制はいまだ十分確立されていない。これは図書館員の専門性・司書の能力の問題にかかわってくるものではあるが、それにも増して云えることは図書館界全体の無理解からくるものである。

古文書の整理は、たゆまぬ努力と忍耐を必要とする。しかし現場で働くものにとつて自己研修の機会は何と無い。地味にコツコツとその作業に携わる者の為、今後ますます、実戦に即した「史料取扱講習会」あるいは「研究集会」の開催されることを関係当局にお願いする次第である。

(終)

続維新政治史関係史料ノ―ト

―「山城国 稲葉家文書」整理補遺―

鎌田 永吉

「山城国 稲葉家文書」は、昭和四七年度に、旧淀藩主稲葉家の当主稲葉正輝氏のご好意によって当館が寄託を受けたものであり、総点数四〇六 points の整理はすでに終わり、一般の公開利用に供されている。寄託の事情および文書の概要については、本誌第一七号に略述しておいたのでそれを参照されたいが、今回は、その整理過程でのメモの一端を紹介しておく。（なお、詳細は別途に発表する予定である）。

右誌上でもふれたように、同「文書」の主要なものは、幕府側からの幕末の政治史料としては第一級の評價がなされている、史籍協会刊『淀稲葉家文書』（大正一五年。以下、「文書」という）の原史料と推定されるものである。このことについて、「文書」も「緒言」において「本書ハ稲葉家ニ於テ作製セル原書ノ副本五冊本ヲ基礎トセリ」として、その稿本があったことをのべている。恐らくは、この稿本に当るものが、本「文書」所収の「正邦公閣老在職中秘書類写」（美濃大判全五冊）であ

ろう（「文書」と稿本との内容上の全き一致は未だこれを確認し得ないところであり、断定はできないが）。「文書」（あるいは稿本）編纂に際して、そもそも稲葉家所蔵史料のうちどの程度の史料について調査し渉獵したのか、もともと稲葉家の稿本収載史料の撰択基準・視点がどこにおかれていたか、大いに興味のあるところであるが、いまは確認のすべはない。

原史料（大部分一紙物）には、通常①一、二、三…（小番号、上・下に分かれることも多い）、②イ一、イ二…、③号外一、二…の三種の符箋が貼布されており（この区別の基準も明確でないが、詳細は別途報告のつもり）、時に「稲葉子爵家蔵」の符箋も見えるが、剥落していることも少なくない。符箋表記は、「文書」（稿本）にもそのまま採用されている。この符箋と内容を頼りに原史料と「文書」を照合してみると、「文書」にあつて「文書」に見当らない史料が若干ある（①で六点、②で五点、③で一点）ものの、これは調査

途次での照合不十分による面もあり、まず「文書」の原史料はほぼ完全に近いかたちで保存されていると言つて良からう。

すなわち、この「文書」所収史料と一致するものを、整理目録では二一・二六七とし、逆に、「文書」（稿本）編集段階で整理され、整理番号と思われる符箋があるのに「文書」に未収録のもの、調査対象にならなかった（か、符箋が剥落した）と思われる「文書」未収録のものが、本文書中に約八〇点発見できる。本文後半に掲載した二六八―三四三までの仮目録を掲げた未収録史料がこれである。若干の照合落ちを考慮に入れて、収録・未収録の数字は変わるとしても、史料の内容・性格から判断しても、なぜこういうかたちで未収録史料が残されたか理由は全く不明である。逆に「文書」が「禁中並公家諸法度」等まで収録していることと合わせ考えると、史料調査や考証、撰択が必ずしも厳密になされていない感を持たざるを得ない。

すでに維新史研究者の間では常識に属することではあるにしても、整理途次における任意の照合によつても、「文書」の誤写・誤読・脱漏・錯簡は甚だしく、恣意的な史料の取扱いも少なからずない（原史料にはない傍点を加えたり、一部変改・

削除など）、年代推定にも再考を要するものがある。これは、「文書」がその「緒言」で明記しているように、全く原本との照合を行わず、前記稿本（「緒言」では副本と称している）をのみ基礎にしたために現われた問題であると推定される。さらに、原本と「文書」の照合過程で最も困惑したのは、史料表題（「文書名」の表記に全く原則がなくて恣意的であること、従つて目次（あるいは索引）がないため検索が困難であったことである。目下復刻中の史籍協会叢書の一部である本「文書」再刊に当つては、幸いに原史料が得られたので充分な校訂が期待されるし、史料表題再検討と合わせて、目次（あるいは索引）の付加がなされれば利用者の利便、これにまさるものはないであろう。

以下に、当館受託の前記「山城国 稲葉家文書」のうち、前記のように一部調査・照合不充分のため重なり合い、今後修正すべき部分もあると思われるが、史籍協会刊本未収録と推定される史料の仮目録を掲げて参考に供する。頭部の数字は目録番号、表題（一）は仮表題、慶応二年三月は慶応二・三のごとく示した。（一）内は一応の内容註記である。

史籍協会刊『淀稻葉家文書』
未収録史料仮目録

- 卯・八
- 283 (撤兵鈴木滝五郎心願書并勅書) (贈 一通
吟味役出仕願) 卯・一〇 二通
- 284 (銃隊差因役並勤方太田吉之丞内願書) 一通
卯・一二
- 285 (老中内御達書案) (諸役人意見聴 一通
取ノ件) (慶応三末カ) 一通
- 286 (老中申合書案) (御所被仰出ニカ 一通
カワラス在来下オリ誠忠ノコト云々) 一通
- 287 (某覚) (諸役人撰・学校等) 一通
(慶応三末カ)
- 288 (前内大臣徳川慶喜歡願書控) (東 一通
叡山退去・東征中止云々) 二通
- 289 (前内大臣徳川慶喜歡願書控) (謹慎 二通
奏請云々) 二通
- 290 (前内大臣徳川慶喜歡願書写) (松平 一通
容保等寛典) 一通
- 291 (小笠原鐘太郎内願書) (騎兵頭被 一通
仰付度願) 正月 一通
- 292 (某書付) (板倉伊賀守家作許可) 一通
五月
- 293 (武藤東四郎内申書) 一〇月 一通
- 294 (御書院番本多日向組森川數馬内願書) 一通
二月
- 295 (小笠原鐘太郎内願書) 二月 一通
- 296 (大関肥後守内願書) (本家西尾家 一通
奸曲札方) 十一月 一通
- 297 (和宮天祥院侍松山常太郎内願書) 一通
一〇月
- 298 (某覚) (内願書取扱方等) 一通
- 299 (某書留) (身辺諸事留) 一通
- 300 (某書留) (御台様警衛等) 一通
- 301 (御広敷番之頭吉川圭三郎高姓名書付) 一通
(慶応一カ)
- 302 (和宮様天祥院侍松山常太郎高姓名 一通
書付) 一通
- 303 (大砲手次) (配置図) 一枚
折一帖
- 304 御号令書 一枚
折一帖
- 305 慶應後方戦回詞令 (号令合図) 一枚
折一帖
- 306 (學問所勤番肝煎宮沢乾蔵経歴書) 一通
一枚
- 307 (田 銃隊歩兵撤兵ニ関スル覚) 一通
一枚
- 308 手控 (書式) 一通
一枚
- 309 芝宇田川町詰撤兵役々狼藉者取押之 一通
一件
- 310 心覚 (稲葉諸事心覚簡条) 一通
- 311 (海軍奉行並支配阿倍四郎三郎家内探 一通
索書)
- 312 (役替之覚) (甲府城代・鳥崎御台 一通
場役人)
- 313 (申合書付) (部屋番相止) 一通
- 314 (心覚) (坪高換算心覚) 一通
- 315 (下総河内内御田領郡名覚) 一通
- 316 (旧新御領高書抜覚) 一通
- 317 (淀江御所替并代知之覚) 一通
- 318 (御城坪數書抜カ) (淀城カ) 一通
- 319 (勅語写) 明治一三・二 一枚
〇
- 320 軍役定 慶安一・一〇 横美半半一冊
- 321 (松平摂津守領地引替御達之書抜) 一通
(上州小幡へ引替) 明和四・閏九
- 322 (立花出雲守御咎御達之書抜) 一通
文化二・二三
- 323 (増山彈正大弼村替御達之書抜) 一通
天保一二・八
- 324 (松平摂津守内願書) 慶応元・八 一通
- 325 (板倉伊賀守松平豊前守御用状) 一通
(坂地カ總動員ノ令) 慶応三・一二
- 326 (某覚) (御養女・伊太利屯上坂・ 一通
七尾一件等) (慶応三末カ)
- 327 (稲葉美濃守自筆覚) (外国形勢・ 一通
秋月右京亮ノ件・水府御用取扱方)
- 328 (菅沼弥兵衛内願書) 一通
- 329 (板倉伊賀守自筆覚カ) (開成所奉 一通
行人撰等)
- 330 (遊撃隊御届吉田直五郎明細勅書) 一通
- 331 (御城絵図) 48 × 34 一鋪
- 332 (二条城絵図カ) 48 × 34 一鋪
- 333 (御供老女衆名前書) 一通
- 334 (淀藩伺書写) 明治三・九 一通
- 335 正權大參事公選名簿 明治三・一〇 一通
- 336 (各藩伺書写) 横半半 一冊
- 337 淀藩庁職員相当表 40 × 28 一枚
- 338 (淀藩大參事以下名前書) 一通
- 339 洪沢栄一書簡 (慶喜公伝掲載史料 一通
借用申込 稲葉正繩宛) 二月 一通
- 340 (詠草二首并詩一題) 一枚
- 341 御短冊筆者目録 二枚
- 342 (軍役之覚) 子・九 一通
- 343 (断簡) 一枚
- 276 (海軍奉行並組勤仕並石川友左衛門明 一通
細短冊)
- 277 (御書院番本多日向組森川數馬心願 一通
書) 寅・一二
- 278 (海軍奉行並組勤仕並石川友左衛門心 一通
願書) (軍艦取調役出仕願) 寅・ 一通
一一
- 279 (勤仕並寄佐野次郎兵衛心願書) 一通
(再勤願) 寅・一二
- 280 (御改革等評議之簡条書) 一通
- 281 (撤兵梶田林之輔内願書) (伊賀者 一通
被仰付度願) 卯・八
- 282 (磯部寛五郎内願書) (上知御止願) 一通
卯・八

彙報

○昭和四八年度事業（その二）

一、史料の収集

「仙台伊達家中小野家文書」を受託（別項参照）したほか、京都最上屋喜八家文書、鯖江藩大庄屋千穂家文書、その他大名旗本家、村方などの文書数件のマイクロフィルムによる収集を予定している。

二、第十九回近世史料取扱講習会の実施
九月一七―二二日東京会場（国立教育会館）、一〇月一五―二〇日京都会場（京都府立総合資料館）において実施した。詳細は別項参照されたい。なお、実施に当って、万般のご配慮、ご協力を賜わった国立教育会館・国立公文書館・京都府立総合資料館その他関係各位に對して、この場所を借りて改めて深甚の謝意を表するものである。

三、定期刊行物発行予定

1 『史料館所蔵史料目録』第二十三集
に「近江国蒲生郡鏡村玉尾家文書」を収録。

2 『史料館研究紀要』第七号に数点の論稿を収載。

3 『史料館報』本号および第二十号（四九年三月）を刊行。

四、近世史料の所在調査

昨年度に引続き、本年度も全国各地の諸関係機関等で作製された既調査の近世

史料目録を収集する予定である。実施の計画は目下立案中であるが、ほぼ昨年度と同程度の史料目録を集めたいと考えている。関係各位の御協力をお願い申し上げます。

○庁舎の新築と移転

昨年度建設を進めていた国文学研究資料館新庁舎第一期工事鉄筋コンクリート五階建地下一階二千九百平方メートルが落成し、併せて池の補修など環境整備も行なわれた。地階・一階は書庫（電動書架設置）、二階閲覧室（未使用）、三階管理部、四階文献資料部・研究情報部で、史料館は五階に移転をした。これらの使用現状は、来年度工事予定の第二期庁舎新築工事の完了までの暫定的措置である。なお、情報閲覧室は旧のままで、閲覧業務は旧庁舎において行なわれている。

○評議員会

九月一日、国文学研究資料館評議員会議が新築庁舎で開催され、管理運営の概況、事業計画と進行状況、明年度概算要求、庁舎の建築、その他について評議が行なわれた。

○人事異動

◆昭和四八年四月一日付
新任 文部事務官 小野 義信
同 同 深川美枝子

新改築に伴う

史料の閲覧利用と

その制限について（続報）

新改築に伴って史料の閲覧利用にご不便をおかけすることについては、すでに前々号から予告しておきましたが、その後の事情を含めてお知らせいたします。

四七年度の新築工事は一応完成し、本年七月末には職員の一部も新築棟へ移りました。が、新書庫の設備は未完であり、何よりも新築の湿度の危険があつて、史料の移動はできません。従つて、事前の計画通り、史料は旧書庫に保管したまま旧館を使って閲覧利用に應じることとし、現在も平常通り閲覧業務を行っています。

当初は今四八年度も引続いて隣接場所へ新築工事実施の予定でした。この場合に閲覧室は旧館の一部を使用する了解が得られましたが、書庫の一部を取壊す計画があり、現有の全史料を残余の書庫に格納することは物理的にも無理なので、比較的用户が少いと考えられる一部の史料を梱包して封鎖せざるを得ません。

このため、今年後半ごろには部分的に閲覧停止となる史料が生じると前々号で予告しました。その後、本年中の着工は延期されましたが、諸種の事情があつて着工期日は容易に確定せず、従つて一部史料を梱包する期日も未定です。期日が決まり次第お知らせしますが、部分的な閲覧停止史料であっても、二―三カ月の予告期間をおくようにして、ある日突然見られなくなることは避けたいと思います。

新改築工事のすべてが完了し、史料を格納する条件（書庫の乾燥など）が整つた時には、五〇万点の史料を移動せねばなりません。目と鼻の先の移転でも、移転には変更ありません。この時には、どうしても半年以上の時間が必要だと考えています。ただし、当館としては、全国の利用者各位へのご迷惑が最少限度ですむように努力しております。この微意をお汲み下さつて、利用者各位に改めて、ご協力をお願いするとともに、当館所蔵史料の利用を予定しているご知人の中でこの事情をご存じない方がおありでしたら、早めに当館へご連絡下さるようお願いいたします。

史料館報 第一九号

昭和四八年一〇月三〇日発行

編集・発行

東京都品川区豊町二ノ三
国文学研究資料館内
国立史料館
電話（七八三）九一（六代）

印刷所

三恵出版印刷株式会社
東京都千代田区神田保町三ノ三
電話（五六二）一四四三番